

日本語の述語句構造 —連結要素をめぐって—

RONI

日本語の述語句構造 —連結要素をめぐって—

R O N I

名古屋大学大学院

ronniewae@yahoo.com

要 旨

日本語の動詞述語句は動詞と述語を修飾する接辞 *qualifier* 形式からなり、その間を接着剤のような連結要素が接続する。この連結要素は「私の本」や「奇麗な娘」の「の」「な」と同じ役割を果たす。動詞の連結要素は *-ru* と *-u* であるが、それぞれ *-ru/-ø/-re*、*-u/-a/-i/-ø/-e* と変化する。この連結要素を立てたことによって、日本語の動詞語幹は # 動詞語根 + 連結要素 # の形式を取ると定式化できる。その中で、# 子音動詞語根 + 連結要素 {-u/-i} # と # 母音動詞語根 + 連結要素 {-ru/-ø} # の形式からなる構造は実際の文において自立できテンス・アスペクト的意味の表示に働くと考えられる。*qualifier* 形式も連結要素 *-u/-ru/-i/-da/-ø* を持つ。この内、連結要素 *-i* を持つ *qualifier* 形式に、*-nai/-ta/-te/-ba* を接続すると、連結要素の変化は動詞系形態 *aru* に由来する「*-ku+aru-*」という要素を媒介する。このように連結要素という考え方を取り入れた整理は、述語句の動詞と *qualifier* 形式の接続、そして *qualifier* 形式同士の接続について、統一的連続的に把握説明するものである。

1. はじめに

Roni (2009) は、日本語の述語構成接辞要素 *qualifier* の研究において、動詞述語句は動詞と *qualifier* 形式からなり、その間に連結要素を立てることができるとした。これによれば、動詞述語句の構造全体は「動詞語根 + 連結要素 + *qualifier* 形式」と整理できる。*qualifier* は Lehmann (1973) が提出した術語で、VO 言語では V の前に、OV 言語は V の後に出現する文法範疇の要素を示す。インドネシア語の *qualifier* を分析した Sudaryanto (1983:42) は、*qualifier* の機能は文全体又は文の一部の意味に影響をしたり、限定したり、意味を変えたり、加えたりすると説明した。文が動詞述語文に代表されるとすると、*qualifier* は動詞を修飾する要素と位置づけられる。これに基づいて動詞の前後の位置を観察すると、日本語における *qualifier* は松本克己 (2006:129-131) が示した「助動詞的成分」に並行する要素であると考えられる。

Roni (2008) では、*qualifier* をまずその構造から、単 *qualifier*、複合 *qualifier*、並列 *qualifier* の三つに分類した¹。単 *qualifier* は例えば *-ba*、*-to*、*-nai*、*-te*、*-rareru*、*-tai*、*-kotoda* 等で、一番単純な *qualifier* 形式である。単 *qualifier* の形式を一部として他の要素と一体化したものは複合 *qualifier* である。例えば *-tekudasai*、*-nakerebanaranai*、*-kotogadekiru* 等である。単 *qualifier* と複合 *qualifier* はそれぞれ一つの *qualifier* 形式として扱う。そして、単 *qualifier* であれ複合 *qualifier* であれいくつかの *qualifier* が並立したものは並列 *qualifier* とする。例えば *-takunai* は *-tai* + *-nai*、*-masen* は *-masu* + *-n*、*-nakatta*

¹ さらに、日本語の *qualifier* は述語の種類によって、動詞 *qualifier*、形容詞 *qualifier*、形容動詞 *qualifier*、名詞 *qualifier* の四つに分けられる。Roni (2008) は前者の動詞 *qualifier* を中心に、Roni (2010) は後者の形容詞 *qualifier*・形容動詞 *qualifier*・名詞 *qualifier* を中心に記述した。

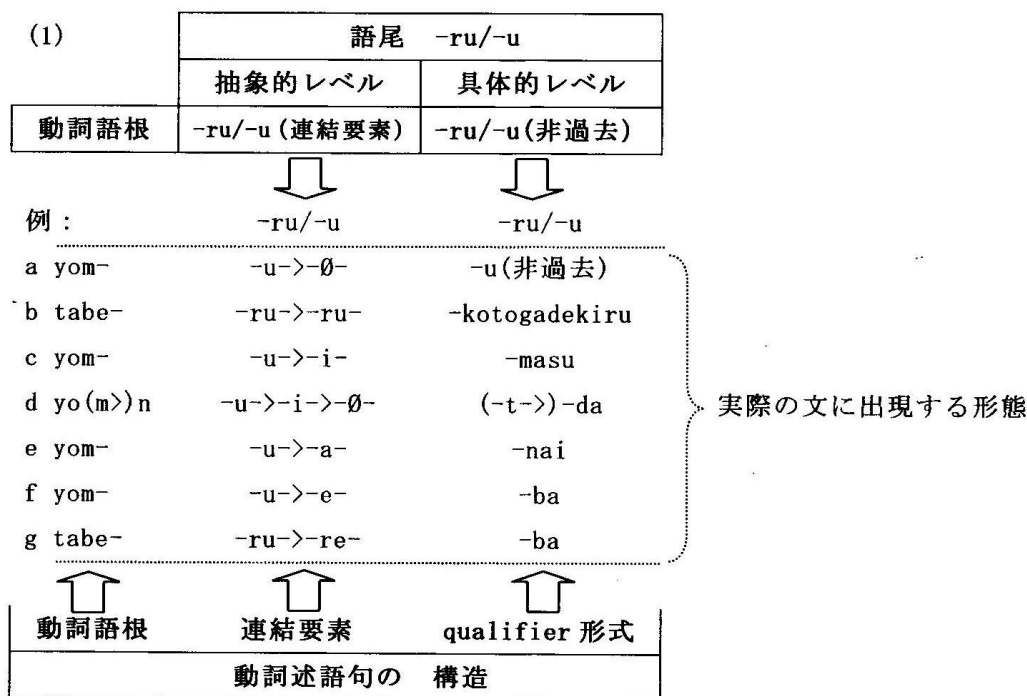
は-nai+-katta等とし、それぞれ自立した qualifier 形式として扱う。

日本語においてRoni (2009)は動詞述語句の連結要素について述べているが、本稿はそこで述べていないことと、述語句の主要要素と qualifier 形式との接続に出現する音素を「連結要素」と考えるメリットを明らかにすることを目的とする。

2. 連結要素

連結要素は、「私の本」のような名詞句構造での no と同じ役割で、要素「私」と要素「本」を連結するものである。この場合、no は接着剤のようなものと例えられ、前要素と後要素を接続する際、出現する。例えば「日本のチーム」「ドラゴンズの選手」などのようである。no と同じ役割を持つ連結要素には「きれいなお嬢さん」「変なおじいさん」の下線部の na もある。

日本語では、特に動詞の-ru/-u と形容詞-i に関して「語尾」という術語があるが、本稿ではこの語尾を抽象的なレベルにおいて連結要素と位置づける。詳しくはRoni (2009)に述べたが、動詞の語尾-ru/-u は語を構成する抽象的レベルでは、意味を持たない連結要素になり、実際の文で使用する具体的レベルでは、時制の意味を持つ要素になる。このように語尾-ru/-u は図(1)のように抽象的レベルと具体的レベルの2面性がある。実際の文では、抽象的レベル-ru/-u はそのまま出現したり語形変化したりの形式と見るべき様相となったりする。動詞の-ru/-u に対しては単なる形態音韻的な接辞要素としてではなく「連結要素」という考え方を積極的に採用する。



注：「>」は前項が次項に変化するという意味である。

日本語では、連結要素を持つ品詞は上記の動詞と形容詞の他に、助動詞（本研究でいう qualifier に相当する）が挙げられる。動詞では-ru/-u を、形容詞では-i を抽象的レベルの連結要素に位置付ける。形容動詞は述語に入る時、規範的に-da が必要であるため、この-da も

連結要素に位置付けられる。qualifier 形式においては、抽象的レベルの連結要素の種類は表(2)のようにまとめられる。qualifier 形式-desu や-teiku の末尾の-u と、qualifier 形式-saseru や-suguru の末尾の-ru と、qualifier 形式-nai や-tehoshii の末尾の-i などがある。名詞「こと」「もの」「ところ」は文法化した qualifier 形式として-da の付いた-kotoda、-monoda、-tokoroda ともなる。この場合の-da も-ru/-u/-i と同じ役割・性格を持つため、連結要素と位置づける。一方、連結要素を持たない qualifier 形式もある。例えば、-ba や-nagara や-ta などである。これらは連結要素を持たない qualifier 形式で、連結要素がないことが重要な特徴である²。

(2) qualifier 形式における連結要素の種類

連結要素類	qualifier 形式	連結要素類	qualifier 形式
-u	-desu	-da	-kotoda
	-masu		-noda
	-teiku		-tokoroda
	-teshimau		-monoda
-ru	-rareru	なし	-ba
	-saseru		-nagara
	-suguru		-e
	-teageru		-ta
-i	-nai		
	-nikui		
	-tehoshii		
	-temoii		

3. 時枝誠記の文法における助詞と助動詞

伝統的な日本語学においては、本稿でいう述語構成要素 qualifier は詞辞の辞として把握されてきたものの一つである。動詞語根と連結要素について、代表的な詞辞論として時枝誠記の記述をとりあげ、時枝が詞辞論の説明に用いた「引出しと引手」を使用して考察してみよう。本節では時枝の引出しと引手、そしてその二つの要素の関係を記述する。

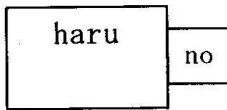
本稿で述べた連結要素 no に関して、時枝誠記は前者の名詞と後者の助詞 no との関係を引出しと引手に例えて詞・辞とした。時枝(1941:271³)は「……引手は形式的には、引出しの一部に附着しているにすぎないものであるが、意味的には、引出し全体を引出すものとして、引出しを統一し総括する関係に立っているもので……」と述べた。更に、(3)のように名詞+連結要素 no だけでなく、名詞+格助詞 ga と動詞+助動詞-ta も引出しと引手の関係を持っているとした(時枝 1941:14)。例(3)では、連結要素 no と格助詞 ga と助動詞-ta はそれぞれ名詞 haru と名詞 hana と動詞語根 sa(k)i の一部であるため、いずれが上位か下位かの関係が見えない。

² -kotoda、-monoda、-tokoroda に並行して、名詞と形容動詞は語彙として連結要素を持たないが、述語に入れる時、規範的に-da を要する。

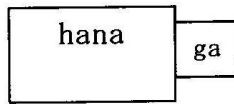
³ ページは岩波文庫版による。

そして、no、ga、-ta は同じように辞として扱われる。

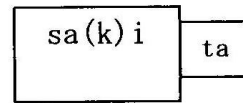
(3a) 名詞+連結要素 no



(3b) 名詞+格助詞 ga

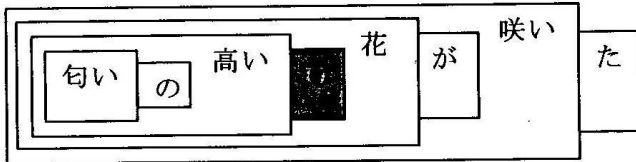


(3c) 動詞+助動詞-ta



一方、助動詞を含む動詞句と格助詞を含む名詞句の関係に関しては、時枝(1941:12)は次の図(4)のように示した。nioi no と hana ga と sa(k)i-ta は上記(3a-c)のように一貫した説明ができたが、takai は引出しとして引手がない。時枝はそこに引手が存在していなければならないと考え、「零記号」を付す(「∅」は筆者が付けた零記号の記号)。図(4)に示したように、「匂いの」と「高い∅」、「匂いの高い∅」と「花が」、さらに「匂いの高い∅花が」と「咲いた」にはそれぞれ上下関係がある。

(4) 時枝誠記の文法による文の構造



(5) haru no hana ga sa(k)i-ta

例文(5) haru no hana ga sa(k)i-ta は、名詞句 haru no hana と動詞句 sa(k)i-ta からなるが、それぞれの句の主な要素は名詞 hana と動詞語根 sak- である。hana は連結要素 no により名詞 haru に修飾され、sak- は連結要素 -u->-i- によって qualifier 形式 -ta に修飾される。動詞 sak(u) は統語・意味論的に経験者という役割である名詞を要請する。名詞は「花」でも葉の「芽」でもいいが、役割的には経験者となる。この経験者は動詞 sak(u) によって生じる。言い換えれば名詞は経験者という役割に依存し、経験者の役割は動詞 sak(u) に依存する。この経験者が文法的に有標か無標かは言語によって異なるが、日本語では格助詞 ga で示される⁴。統語的には、ga で表示される経験者は動詞句との関係を示す。このように、助詞と助動詞(qualifier)は使用されるレベルは異なる。qualifier 形式は述語句のレベルで主な述語要素を修飾する要素である。一方、助詞は節レベルの要素であり、述語と主語(さらに目的語とそれと相当する分節構造)の関係を示す。

4. 動詞の語根と語幹

本節では動詞の語根と語幹について述べる。日本語学では、語根と語幹に関する説明がさまざまな立場からなされて一定していない。日本語において、活用について議論する時には、語幹と語尾という術語がよく使用される。例えば(6)動詞 taberu と kaku は語彙的な意味を持つ形態素で、語というのに対して、-nai と -masu は語彙的な意味を持たない形態素で、接辞である。活用形について語幹・語尾という術語を用いれば、学校文法での語幹「た(食)」・活用語

⁴ 日本語では、話し言葉で「花、咲いたよ。」のように無標の時もある。

尾 (べ・べ・べる・べる・べれ・べよ) が形態論的に厳密でないため考慮しないが、日本語教育で採用された活用形について見ると、基本形 *taberu*、否定形 *tabenai*、丁寧形 *tabemasu* はそれぞれ *tabe-* が語幹で、*-ru* (時制) と *-nai* (否定) と *-masu* (丁寧) が語尾ということになる。一方、*kaku* は *kak-* が語幹で、*-u* が語尾であり、そして、*kakanai* と *kakimasu* はそれぞれ *kaka-*、*kaki-* が語幹で、*-nai*、*-masu* が語尾となる。語形変化の生じない要素を厳密に区別して語根とすれば、語根は *kak-* である。その場合、子音動詞の *kaka-* の最後の音素 *a* と *kaki-* の最後の音素 *i* はどう位置付ければよいだろうか。本研究では、このような *a* や *i* を抽象的レベル *-u* (母音動詞では *-ru*) と同様に連結要素に位置付ける。

動詞構造	
語幹	語尾
<i>tabe-</i>	<i>-ru</i>
<i>tabe-</i>	<i>-nai</i>
<i>tabe-</i>	<i>-masu</i>
<i>kak-</i>	<i>-u</i>
<i>kaka-</i>	<i>-nai</i>
<i>kaki-</i>	<i>-masu</i>

語幹			語尾
動詞語根	+	連結要素	
<i>tabe-</i>	+	<i>-ru-</i>	<i>-ru</i>
<i>tabe-</i>	+	\emptyset	<i>-nai</i>
<i>tabe-</i>	+	\emptyset	<i>-masu</i>
<i>kak-</i>	+	<i>-u-</i>	<i>-u</i>
<i>kak-</i>	+	<i>-a-</i>	<i>-nai</i>
<i>kak-</i>	+	<i>-i-</i>	<i>-masu</i>

Q	連結
語根	要素
<i>-ru</i>	\emptyset
<i>-na</i>	<i>-i</i>
<i>-mas</i>	<i>-u</i>
<i>-rare</i>	<i>-ru</i>
<i>-sase</i>	<i>-ru</i>
<i>-ba</i>	\emptyset

これまでの筆者の研究では、日本語動詞の構造は「動詞語根+連結要素」とした。動詞の語尾 *-ru* と *-u* においては、抽象的レベルと具体的レベルの二面性がある。抽象的レベルの連結要素 *-ru/-u* は実際の文では *-ru*、*-u*、*-a*、*-i*、 \emptyset 等になる。具体的レベルの *-ru/-u* は時制の意味を持つ語尾 (本研究でいう *qualifier* 形式) である。つまり、表(7)のように、語幹は一貫して「動詞語根+連結要素」という形式に従うと考えられる。そして、上の節では、連結要素を持つ要素は動詞・形容詞の他に、助動詞の中でも連結要素を持つ形式もあると述べた。*qualifier* (Q) 形式についても表(8)のように、「Q語根+連結要素」からなる。言い換えれば、*qualifier* 形式は、基本的に動詞等述語の語幹の構造 (「動詞語根+連結要素」) と同じように、「語根+連結要素」の構造からなると考えられる。一方、表(2)に示したように、「語根+連結要素なし」という構造で連結要素を持たない *qualifier* 形式もある⁵。

本稿でいう「語根」の概念に対しては、鈴木重幸(1973)や城田俊(1998)が「語幹」という術語を使用する⁶。鈴木は、意味的に分解できない単語づくりの要素という面で「語幹」はイコール「語根」とも考えた (p. 159) が、連結要素については考えていない。例えば、*yom-u-na*、*yom-u-mai*、*yom-a-zu*、*yom-a-nai* の下線部 *u*、*a* は *yom-* と否定形 *-na*、*-mai*、*-zu*、*-nai* の連結要素でなく、鈴木は「...うちけしの動詞とは語幹をことにする形式が、うちけしの動詞の文法的な形のうめあわせとしてもちいられているのである。」(下線は筆者による)と説明した

⁵ この場合、連結要素 \emptyset と連結要素なしが区別される。前者は元々連結要素があるが、次の要素に接続することによって、連結要素が消える。例えば、動詞 *tabe-ru* に *qualifier* 形式 *-nai* を接続すれば動詞の連結要素 *-ru* は消えて *tabe-(-ru> \emptyset)+nai=tabenai* になる。つまり、連結要素 *-ru* は連結要素 \emptyset になる。後者は元々連結要素を持たない。例えば、*qualifier* 形式 *-nagara* や *-ta* などは連結要素がない。

⁶ 鈴木重幸(1973:150-155, 159)を、城田俊(1998:6)を参照。

(p. 155)。しかし、yomimas-i-ta の-iに対して、鈴木は「第一変化動詞の第一のタイプの音便語幹(hanas-u>hanas-i-ta)をつくる要素の-iに相当するものである。」と説明した(同頁)⁷。ここでいう「うめあわせ」は本研究の連結要素の概念に近い役割を持っているが、「音便語幹」とは異なる。このように、「うめあわせ」と「音便語幹」は本研究でいう連結要素と違う位置づけであると考えられる。一方、城田(1998)は本研究の「連結要素」に類似する「結合要素」を設定しているが、概念的には大きく異なる。例えば tabe(∅/r)are-ru、tabe(∅/s)ase-ru、kak(a/∅)na-i では、(∅/r)、(∅/s)、(a/∅)は「結合要素」であり、それぞれのカッコの前者は子音動詞での結合要素、後者は母音動詞の結合要素である。そこで受身・使役・否定を表す要素はそれぞれ areru、aseru、nai である。一方、本稿では母音語幹動詞の場合を基準とした形態的分析からその三つを表す要素はそれぞれ rareru、saseru、nai とするため、連結・結合要素は特に前者の tabe(r)areru、tabe(s)aseru では r、s ではなく、tabe(∅)rareru、tabe(∅)saseru のように、∅ である。このように、本稿で扱う連結要素(結合要素)は城田の「結合要素」の考え方とも異なる。

5. 自立性を持つ動詞形態

日本語の動詞述語の構造は簡単に言えば「動詞+qualifier」からなり、動詞も qualifier も拘束形態として同じ扱いで位置づけられ、それぞれ「語根+連結要素」から構成される。連結要素のある qualifier は具体的レベルで「qualifier 形式の語根+連結要素」という構造で全て自立性を持たない形態であるが、動詞は「動詞語根+連結要素」という自立性を持つ構造がある。子音動詞の場合、「動詞語根+連結要素-u/-i」であるが、母音動詞の場合、「動詞語根+連結要素-ru/∅」である。例えば、子音動詞 kaku は動詞語根 kak-と連結要素-u 又は-i を接続して kaku と kaki になり、それぞれ自立できる。母音動詞 taberu は動詞語根 tabe-と連結要素-ru 又は∅を接続して taberu と tabe になり、それぞれ自立できる。この説明で自立性を持つ動詞は次の表(9)の形式に従う。

(9) 自立性を持つ動詞

$$\# \text{動詞語根} + \text{連結要素} \# \begin{cases} \# \text{子音動詞語根} + \text{連結要素} \left\{ \begin{array}{l} -u \\ -i \end{array} \right\} \#^8 \\ \# \text{母音動詞語根} + \text{連結要素} \left\{ \begin{array}{l} -ru \\ -\emptyset \end{array} \right\} \# \end{cases}$$

表(9)の形式は次のように説明できる。日本語では、自立性を持つ動詞は#動詞語根+連結要素#という形式に従っている。規則のある動詞は子音動詞と母音動詞であるため、その形式は#子音動詞語根+連結要素{-u/-i}#と#母音動詞語根+連結要素{-ru/-∅}#となる⁹。この

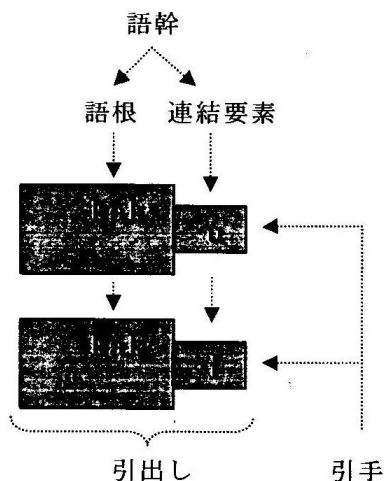
⁷ 「音便語幹」は「基本語幹」と対立する。例えば yom-u の yom は yon-da の yon と同じもので、異形態であるが、基本形として yom で、音便として yon である。

⁸ -u と -i は括弧 { } の中にあるが、{-u 或いは -i} という意味である。つまり、「子音動詞語根+連結要素」では、「子音動詞語根+連結要素-u」と「子音動詞語根+連結要素-i」の二つがある。

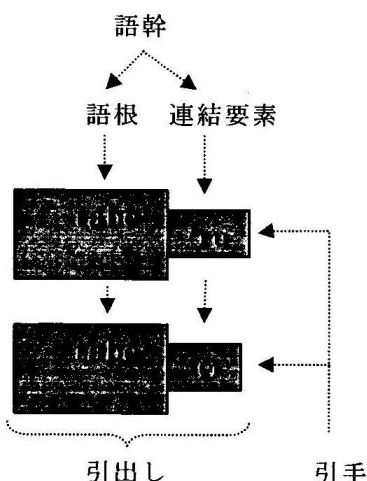
⁹ 子音動詞語根-i と母音動詞語根-∅は従属節の述語動詞や丁寧 nomi+masu、tabe+masu などで使用される。子音動詞語根-u と母音動詞語根-ru は禁止 nomu+na、taberu+na や可能性 nomu+kotogadekiru、taberu+kotogadekiru などで使用される。

ような意味で、筆者は時枝が説明した表(4)の「風呂敷型統一形式」の図解を以下のように修正したい¹⁰。つまり、引出しの引手としては、時枝が述べた助詞・助動詞でなく、4節で説明した語幹の構造での連結要素である。例えば、「書く」と「食べる」を使用すると、表(9)の形式はそれぞれ次の表(10)と(11)の形に象徴される。このように、引手である連結要素-u/-ruはそれぞれ引出しである kak/tabe と一体化する。別の形態と接続する際の際のみ、引手である連結要素は変化すると考えられる。ゆえに、引手の種類がいろいろあるのと同様に、連結要素の形式の種類も様々であって異形態と位置づけられる。

(10) 引出し: 子音動詞



(11) 引出し: 母音動詞



#動詞語根+連結要素#の形式に従う動詞語幹は自立性を持つ要素である。このような要素は意味論における語彙素の概念に似ている。語彙素は意味を持つ言語単位として、形態論的に「形態素」に相当するが、統語論的には「語」に相当する¹¹。表(8)の形式はこの三つの条件を満たす。例えば、表(9)の#子音動詞語根+連結要素{-u/-i}#に従う kaku と kaki は意味を持つ言語単位として「書く」という意味を持ち、形態論的には抽象的レベルで u と i が意味を持たないため、引出しのような kak(u) と kak(i) は意味を持つ最少の要素である構造であり、統語論的には自由な「語」として節・文の材料になる。

6. 連結要素・節・-da の付加による qualifier の分類

2節では、連結要素の有無の観点から見て、qualifier 形式を五つに区別できるとした。本節では、qualifier 形式は主節の述語句に出現するか従属節の述語句に出現するかの観点と、qualifier 形式として -da の必要性の観点を加えて整理する。結果を簡単にまとめると、次の表(12)のとおりである。まず、連結要素 -u、-ru、-i を持つ qualifier 形式は、連結要素の変化によって主節・従属節のどちらも出現できるものは A 類に入れる。元々助動詞でないが、意味的に抽象化し -da を加えて助動詞になるものは B 類に入れる。このような qualifier 形式は本来は連結要素 -u、-ru、-i を持つ qualifier 形式と全く同じである。次に qualifier 形式として -da が不要なのが C 類 qualifier 形式である。一般に従属節専用であるが、-da を加え

¹⁰ 時枝 (1941/2007:271) を参照。

¹¹ Verhaar, JWM (1977:114-116)、Abdul Chaer (1990:8)、Abdul Chaer (2008:21-23) を参照。

ることによって主節に出現できる。D類とE類の qualifier 形式は連結要素を持たない形式である。-da を付加することもできない。違いは、D類は主節に出現する qualifier 形式であるが、E類は従属節にのみ出現する qualifier 形式であるという点である。F類 qualifier 形式は連結要素-iを持ち、主節に出現する qualifier 形式である。

4節では、動詞語幹は「動詞語根+連結要素」の形式に従うと説明した。言い換えれば、「語根+連結要素」が語幹を構成する。qualifier 形式には「語根+連結要素」の構造もあるし、「語根+連結要素なし」という構造もある。この場合、前者はA・B類のように語根と語幹が違うものであるが、後者はC・D・E類のように語根が語幹と同様である。後者の qualifier 形式に別の qualifier 形式を接続する場合、そのまま接着して連結要素が不必要である。

一方、F類に関しては主節に出現するため、D類に近いが、連結要素の存在でA・B類にも近い。命令の-nasai、依頼の-tekudasai は動詞系形態 nasaru と tekudasaru に由来する。構造末の-ru が-i になった-nasai、-tekudasai はその後別の qualifier 形式を接続することができず、-i が-ru などに変化することもないため、nasa-と-tekudasa に一体化して一つの語根を構成していると考えられる。語根と語幹には連続性があるとすれば、-nasai と-tekudasai は語根に一番近い語幹として位置づけられる。

表(12)連結要素・節・-daの付加による qualifier(Q)形式の分類

qualifier (形式の名前)	連結要素の存在	従属節 ¹²	主節	Qとして -daの必要性	Qの種類	語根・語幹
1	2	3	4	5	6	7
-desu	○	○	○	×	A	語根 ≠ 語幹
-tai	○	○	○	×		
-rareru	○	○	○	×		
-kotoda	○	○	○	○	B	
-noda	○	○	○	○		
-tokoroda	○	○	○	○		
-ppanashi(de)	×	○	△	△	C	語根 = 語幹
-tame	×	○	△	△		
-kara	×	○	△	△		
-ka	×	△ ¹³	○	×	D	
-ta	×	×	○	×		
-e	×	×	○	×		
-ba	×	○	×	×	E	
-kedo	×	○	×	×		
-nagara	×	○	×	×		

¹² 名詞修飾節を含まない。

¹³ 例えば「私は彼がスラバヤへ行ったか分かりません。」「何時に出発するか聞きましょう。」

-nasai	○	×	○	×	F	語根に近い語幹
-tekudasai	○	×	○	×		

○:ある又は条件を満たす ×:ない又は条件を満たさない △:ある条件で認める又は必要性が低い

実際、F類の-nasai と-tekudasai には、時制を表す要素を接続できない。広い意味の依頼・命令(13-15)、禁止(16)、誘い(17)、意志(18)を表す節は常に時制の形態を持たないことが関係していると考えられ、興味深い。連結要素を持つ qualifier 形式には、その後常に時制の要素が接続できる。例えば-des(u>i)ta、-rare(ru>∅)ta、-tokorod(e>a)(a>∅)(r>t)ta のようである。一方、連結要素を持たない qualifier 形式(特にD類とE類)は常にその後時に時制の要素を接続できない。

- (13) ここで写真を撮らないでください。 (MNS 17/138)
 (14) 是非行ってきなさい。 (SNC 4/55)
 (15) 急げ。 (MNS 33/60)
 (16) 触るな。 (MNS 33/60)
 (17) 皆来たら、始めよう。 (MNS 31/47)
 (18) 明日買い物に行こう。 (作例)

7. qualifier 形式間の連結要素

Roni (2009)は子音動詞(-u 動詞)を中心に、連結要素を整理した。子音動詞語根と qualifier 形式が接続する際、間には-u、-a、-i、-∅、-eという音素が観察され、連結要素-uの異形態のメンバーとして位置付けられた。nom-u-kotogadekiru、nom-a-nai、nom-i-masu、nom-∅-oo、nom-e-ba では、下線部のように動詞語根 nom-に可能-kotogadekiru、否定-nai、丁寧-masu、観誘-oo、仮定-ba という qualifier 形式を接続することによって、yomuの語幹末音素-uは、-u、-a、-i、-∅、-eと変化する。これらの音素は「私の本」や「きれいなお嬢さん」などの下線部-no、-naと同様に、先行要素と後行要素を文法的に結び付ける機能を果たすもので、連結要素と位置づけられた。連結要素は動詞語根と qualifier 形式の間のみ存在するのではなく、qualifier 形式と qualifier 形式の間にも存在すると考える。本節では、Lehmann (1973)が取り出した日本語の qualifier 形式に限り、連結要素の現象を観察しておく。

Lehmann が取り出した日本語の qualifier 形式は疑問-ka、否定-nai、願望-tai、可能-eru と-rareru、使役-seru と-saseru、受身-reru と-rareru、仮定-ba、過去-taである。これらの形式は-ka、-na-i、-ta-i、-e-ru、-se-ru、-sase-ru、-re-ru、-rare-ru、-baの下線部の要素が qualifier 形式の語根である。残っている要素-i と-ruは言い切りとして具体的レベルでは時制形式となり、抽象的レベルでは連結要素である。一方、-ka と-baは連結要素を持っていない。

連結要素は実際の文では、無くなったり別の要素に変わったりする。連結要素-ruを持つている qualifier 形式(19A)に qualifier 形式(19B)を接続した場合、-ruは-∅と-reになる。

(19) qualifier 形式の連結要素-ru

		B				
		-nai	-tai	-ta	-rareru	-ba
A	-e(ru)	ru>∅	ru>∅	ru>∅		ru>re
	-re(ru)	ru>∅	ru>∅	ru>∅		ru>re
	-rare(ru)	ru>∅	ru>∅	ru>∅		ru>re
	-se(ru)	ru>∅	ru>∅	ru>∅	ru>∅	ru>re
	-sase(ru)	ru>∅	ru>∅	ru>∅	ru>∅	ru>re

8. 連結要素-i

興味深いのは、連結要素-i を持っている-tai、-nai である。-tai、-nai に過去を表す qualifier 形式-ta を接続すると-takatta、-nakatta となる。その語根はそれぞれ-ta、-na であるので、過去を表す形式は-ta ではなく、-katta であるとの分析も成り立つ。

-rareru や-saseru の形式は母音動詞と同じ連結要素-ru を持っているのに対して、-tai と -nai の形式は形容詞と同じ連結要素-i を持っている。形容詞に動詞を接続する場合、oso-ku-kuru(遅く来る)や haya-ku-kaeru(早く帰る)などのように、osoi と hayai の連結要素-i が-ku になる。-nai は否定を表す qualifier 形式であるが、形容詞系形態からなる。ゆえに、形容詞と同じ形態的現象を示す qualifier 形式-tai の場合、形容詞と同様に-i が-ku になる。例えば願望-tai+否定-nai>-takunai となる。先行する-tai は-taku に変化する。

-takunai に類似した現象は願望・過去-takatta である。「いい」と「だ」は過去の形を持たないが、それぞれ類似形態の「よい」「である」を経て「よかった」「であった」になる。deatta は下線部の音素 e が脱落して、d(e>∅)atta>datta になる。同様に、-takatta は願望-tai と動詞系形態 aru を使用して-ta-ku-aru になるが、aru は動詞系形態のため、動詞と同じように変化する。aru は過去形にしたら、ar(i>∅)ta のように音素 i が脱落してから、a(r>t)ta のように音素 r は次の音素 t に同化する、というプロセスで atta になり、全体的には ta-k(u>∅)-atta になる。さらにそこに音素-u が脱落する現象が生じ、-ta-k-atta になると考えられる(20A)。この-atta を-ta の異形態と位置づけることもできるが、その場合、連結要素 i>ku という変化を認めて、連結要素 k のみが残っていると考えられる。しかし、あくまでも動詞系形態 aru は媒介するものであり、過去を表す要素は-ta のみであるので、本稿では kuari>kat を連結要素と位置づける。-takatta と全く同様に否定・過去-nakatta は(20B)に示すように分析できる。

(20) -takatta・-nakatta の語形変化

A	B
-takatta	-nakatta
ta + (i>ku) + aru	na + (i>ku) + aru
ta + ku + ar(i>∅)ta	na + ku + ar(i>∅)ta
ta + ku + a(r>t)ta	na + ku + a(r>t)ta
ta + k(u>∅) + at ta	na + k(u>∅) + at ta
ta k at ta	na k at ta

語形変化において、-takatta・-nakatta と異なる様相が観察されるのは qualifier 形式-tai と-nai に qualifier 形式-te を接続する場合である。-tai は-takute に、-nai は-nakute になる。これらの語形変化は次の表(21)A、Bのとおりである。そこで ari は \emptyset になる。この場合、連結要素 kuari>ku が残っていると考える。

(21) -takute・-nakute の語形変化

A	B
-takute	-nakute
ta + (i>ku) + aru	na + (i>ku) + aru
ta + ku + (ari)te	na + ku + (ari)te
ta + ku + (\emptyset) te	na + ku + (\emptyset) te
ta ku te	na ku te

-nakatta と-takatta の構造に類似した現象は否定・仮定-nakereba と願望・仮定-takereba にも観察できる。表(22)のように、これらも動詞系形態 aru を介在させて構成される。否定 na-i と願望 ta-i はそれぞれ動詞系形態 aru を接続すれば連結要素-i は nakuaru と takuaru のように -ku になる。一方、aru は仮定形にすれば ar(u>e)ba になる。全体的には-nak(u+a=e)reba と-tak(u+a=e)reba である。ここでも音素 u と a が接続して e になると考えられ、-nakereba と-takereba という構造になる。この場合、連結要素は kuare>kere である。

(22) -nakereba・-takereba の語形変化

A	B
-nakereba	-takereba
na + (i>ku) + aru	ta + (i>ku) + aru
na + ku + ar(u>e) + ba	ta + ku + ar(u>e) + ba
na + ku + are + ba	ta + ku + are + ba
na + k(u+a=e) re + ba	ta + k(u+a=e) re + ba
na ke re ba	ta ke re ba

-nakereba と-takereba の把握は-nakatta と-takatta より相対的に困難である。過去を表す形式は atta、ta いずれも分析しやすいが、仮定を表す形式は-ereba、-ba いずれも分析しにくい。日本語教育では事実上、過去・仮定-ta と-ba の他に、それぞれ-katta と-kereba を立てる説明がなされている。過去・仮定を表すものはあくまでも-ta と-ba であり、動詞系形態 aru はただ介在要素として、つまり、aru を生かして連結要素を成しているのである。ゆえに、表(23)でカッコの中に入れてある-at-と-ere-はその前にある音素 k とともに連結要素として考えた方がよいだろう。つまり、-kat-と-kere-が連結要素と位置づけられる。

(23) -tai・-nai の連結要素 i の変化

		B		
		-nai	-ta	-ba
A	-ta	-ku-	-k(at)	-k(ere)
	-na		-k(at)	-k(ere)

このように、-tai や -nai のように連結要素-i を持つ qualifier 形式に -ta、-te、-ba、-nai 等を接続する場合、動詞系形態 aru に由来する連結要素による。つまり、i は ku になり、aru を加えて、「-ku+aru-」という要素を媒介すると考えられる。

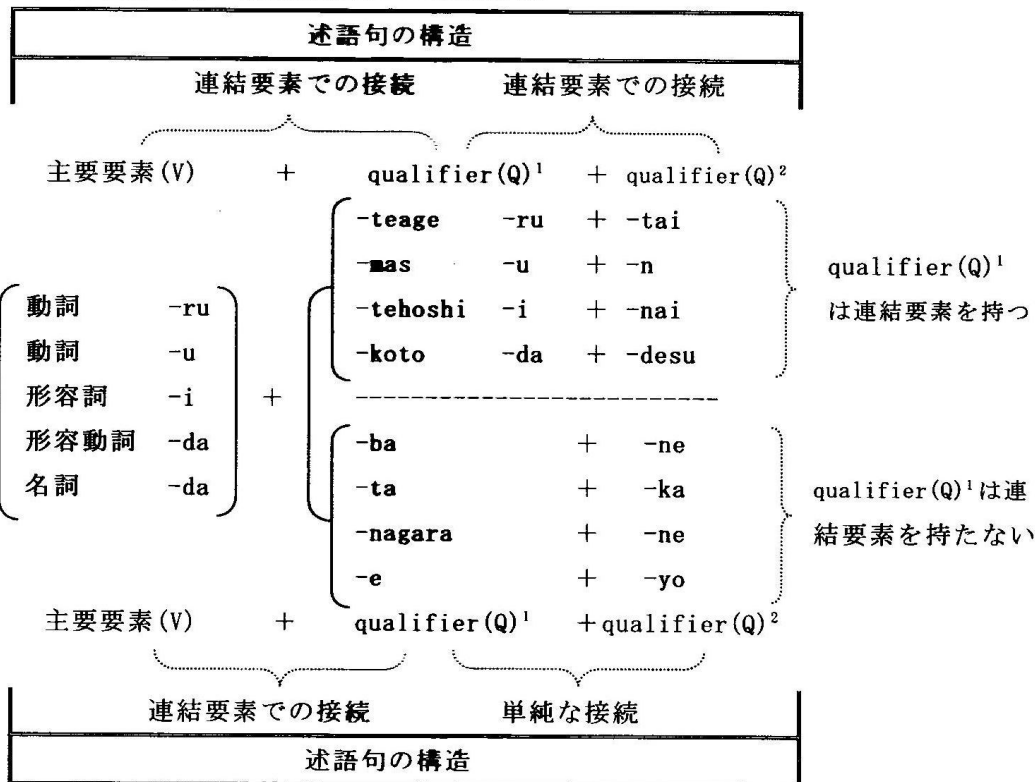
9. 接続の方法

上記のように、述語句においては、主要要素と qualifier の接続、そして qualifier と qualifier の接続がある。述語句の主要要素は動詞、形容詞、形容動詞、名詞の四つに分類されるので、述語句の全体の構造は「動詞・形容詞・形容動詞・名詞+qualifier¹+qualifier²+…+qualifierⁿ」と定式化できる。この場合、述語句の主要要素は動詞-ru/-u、形容詞-i、形容動詞-da、名詞-da ということによって全部連結要素を持っているが、qualifier 形式に関しては2節の表(2)のように、連結要素-u (-desu、-masu)、-ru (-reru、-teageru)、-i (-nai、-tehoshii)、-da (-kotoda、-noda)を持つものと、qualifier 形式-nagara、-ta 等のように連結要素を持たないものがある。

述語句での接続は、「主要要素と qualifier (V+Q) の接続」と「qualifier と qualifier (Q+Q) の接続」の二つに区別できる。連結要素について、元々は述語句の動詞・形容詞・形容動詞・名詞と qualifier との接続で成り立ったものであり、その構造の場合、前者の動詞・形容詞・形容動詞・名詞の連結要素が変化する。これを V+Q の接続という。Q+Q の接続も同様である。V+Q の構造にさらに、次々に qualifier を接続する場合、一番後ろの qualifier の連結要素は変化せず、前項要素となる qualifier の連結要素の方が変化する。述語構造は、主要要素も qualifier もともに「連結要素」によって接続すると整理できる。一方、Q+Q の接続において、連結要素を持たない qualifier 形式に次の qualifier を接続する場合、前者の qualifier 形式には連結要素がないため、「単純な接続」でそのまま接着して接続する。

このように、述語句における構成要素同士の接続方法は次の表(24)のようである。述語句の V+Q の接続はすべて「連結要素での接続」となるが、Q+Q の接続では、qualifier が連結要素を持つものは「連結要素での接続」の方法をとり、qualifier が連結要素を持たないものは「単純な接続」の方法をとる。単純な接続をするものは、対人的なモダリティ要素が多い。詳細な分析は今後の課題とする。

(24) 述語句での構成要素同士の接続方法



10. まとめ

以上、本稿では次のような点を確認整理した。

- ◇ 語構造の抽象的レベルでは、動詞は連結要素-uと-ruを持つ。形容詞は-i、形容動詞・名詞は-daを持つ。同様に、qualifier形式は連結要素-u、-ru、-i、-da、-0を持つ。日本語はqualifierも併せて、その形態の品詞性によってこれだけの連結要素を使い分けている。
- ◇ 詞辞の別を基本原理とすることで知られる時枝誠記の文法論において、助詞・助動詞(本研究のqualifier)が辞として引出しの引手に例えられるが、本研究では辞要素のうち、動詞述語句内の要素を連結要素で結ばれる形態として、助詞とも区別する。時枝誠記が示した詞辞論に対し、本研究では助詞と助動詞が統語的にそれぞれ別のレベル(助詞は節、助動詞は句)で機能することを示した。学校文法も含めほぼ時枝の見方に重なる日本語詞辞論について、再検討の必要がある。
- ◇ 日本語の動詞語幹は#動詞語根+連結要素#の形式を取ると定式化できる。その中で、#子音動詞語根+連結要素{-u/-i}#と#母音動詞語根+連結要素{-ru/-0}#の形式からなる構造は実際の文で、自立し、具体的レベルの要素として、テンス・アスペクト的意味等の表示となる。
- ◇ 連結要素-iを持つqualifier形式(-taiや-nai)が、否定-nai、過去-ta、接続-teを接続する場合、連結要素の変化は動詞系形態aruに由来する-ku+aru-という要素を媒介する。
- ◇ このように、述語句構造を述語の主要要素とその連結要素、qualifier(Q)とその連結要素という観点から整理することによって、述語句での主要要素とqualifier(V+Q)の接続、

そして *qualifier* 形式同士 (Q+Q) の接続について、統一的連続的に把握説明できる。V+Q の接続には連結要素を使用して接続する。つまり、「連結要素での接続」の方法をとる。Q+Q の接続には、二つの接続方法を区別する。前者の Q は連結要素を持つものは V+Q の接続と同じように「連結要素での接続」の方法をとるが、前者の Q は連結要素を持たないものには後者の Q がそのまま接着して接続する。つまり、「単純な接続」の方法をとる。この接続の違いは V+Q の接続と Q+Q の接続の違いに重なるものである。

引用文献

- 田中よね他 2002 『みんなの日本語初級 I』スリーエーネットワーク
- 田中よね他 2002 『みんなの日本語初級 II』スリーエーネットワーク
- 城田俊 1998 『日本語形態論』ひつじ書房
- 鈴木重幸 1972 『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 時枝誠記 1941 『国語学原論』岩波書店(2007 岩波文庫版『国語学原論(上)(下)』)
- 松本克己 2006 『世界言語への視座—歴史言語学と言語類型論—』三省堂
- Abdul Chaer. 2008. *Morfologi Bahasa Indonesia (Pendekatan Proses)*. Jakarta: Rineka Cipta
- Abdul Chaer. 1990. *Pengantar Semantik Bahasa Indonesia*. Jakarta: Rineka Cipta
- AOTS 2005 『新日本語の中級』スリーエーネットワーク
- Lehmann, WP. 1973. "A Structural Principle Of Language And Its Implications" in *Language* Vol. 49 No. 1
- Roni. 2010 「日本語における *qualifier*—形容詞・形容動詞・名詞述語を中心に」『名古屋大学人文科学研究』第 39 号 (2010 年 3 月)
- Roni. 2009 「述語句末音素の形態音韻論的位置づけ」『名古屋大学人文科学研究』第 38 号 (2009 年 2 月)
- Roni. 2008 「日本語の動詞 *qualifier*」『名古屋大学国語国文学』第 101 号 (2008 年 11 月)
- Sudaryanto. 1983. *Predikat-objek dalam Bahasa Indonesia, Keselarasan Pola-urutan*. Penerbit Djambatan
- Verhaar, JWM. 1977. *Pengantar Linguistik*. Yogyakarta: Gadjah Mada University Press